

大田原文化



第 33 号
大田原文化協会
令和 6 年度

目次

一	ごあいさつ	大田原文化協会会長	田中 和夫	1
二	今を生きる	書道	川上 鳴石	2
三	文芸部	短歌部門	藤沼緋紗子	3
		俳句部門	中山 逍遙	6
		大田原俳句会	直篁 正美	8
		風の会	森 加名恵	10
		秋桜の会	木下 浩二	11
		秋桜の会の現状と展望	黒澤 恵子	12
		季語について	安達 信悟	13
四	美術部	第三十九回大田原文化協会美術展	蜂巣 貞美	17
		大田原油絵クラブ	後藤 茂	18
		たちばな画遊会と写佛の会について	越沼てつ子	19
		水彩画とともに歩む	塩野 玄機	21
		書道部の結果と書展について	増子 梢風	22
		華道登録無形文化財に	瀬尾 清子	23
		今年も茶会ができた喜び	蜂巣 貞美	24
五	茶道部	大田原宝友会	平山 正彦	25
六	ステージ部	盆栽園芸部門	熊田 茂	27
七	盆栽園芸部	大田原将棋愛好会	事務 局	28
八	囲碁将棋部	全国将棋サミット2024	飯島 健司	29
九	大田原文化協会事務局より			
十	編集後記			

題字 書家 酒井真沙 表紙 茶道部 「第七十六回那須地区芸術祭 茶会」 広報部長

いあいさつ

大田原文化協会

会長 田中 和夫



米国の大統領にトランプ氏が就任し、何か

と世界が翻弄されています。

私は「大過なく」という言葉はあまり好きではありませんが、あまりにも劇的に変化するのも考えものです。



昨年の十二月十一日（水）、栃木県公館において、第七十八回栃木県芸術祭の表彰式が行われました。

大田原市関係の受賞者を紹介させていただきます。

■詩・準文芸賞

長嶋和彦

■民謡・芸術祭奨励賞

小藤ツネ子

■吟詠剣詩舞・芸術祭賞

北部地区協議会

(大田原市を含む)



私はステージ部門の所属で詩吟をやっておりますが、詩吟とは文字通り詩を吟ずるものです。厳密に言いますと、漢詩や新体詩を吟ずることを「詩吟」と言い、和歌を吟ずることを「朗詠」と使い分けます。

この趣味をやっておりますと、様々な漢詩に接することになります。今回はその中でも私の愛吟している漢詩をひとつ、紹介させていただきます。

平常心

春有百花秋有月

夏有涼風冬有雪

若無閑事挂心頭

便是人間好時節

(読み下し)

春に百花あり秋に月有り

夏に涼風あり冬に雪有り

もし閑事の心頭に掛かる無くんば

便ち是れ人間の好時節

(春には百花が咲き乱れ、秋には月が清く輝く。夏には涼しい風が吹き渡り、冬には冷たい雪が降る。もし、心にこだわりさえなければ、年がら年中、世間にとって、最高の季節じゃないか。)

これは『無門関』という禅門修行者の公安集(テキスト)の一節です。浅学非才の私にはこの『無門関』という書物にはまったく理解が届きません。しかしながらこの部分は何となくわかった様に思っております(思っているだけかもしれません)。

自然の美しさは常にそこに存在しているのですが、忙しさに追われていると、ついそれを見失ってしまう。同じ様に心にこだわりがあると、見えるものも見えなくなってしまう、本質を見逃してしまう。そんな意味と捉え、吟じる度に自分を戒める材料としております。

心に何の拘りも持たずに生きて行くことは、かなり難しいことではありますが、拘りを捨てた時にふっと心が軽くなった経験はありませんか。

失敗したときに、何とか取り繕うとして、嘘を言ってしまったら、心が苦しくなったことはありませんか。素直に謝ってしまえば、どんなにか楽になることでしょうか。

全てが全て、そうすることで上手くいく訳ではありませんが、少なくとも拘りを捨て、欲を捨てた時に心の平安が訪れるのではないのでしょうか。



結びに、この広報誌の編集に携わっていただきました文化協会広報部の皆様、そして大変な労力を割いて下さいました文化振興係の御担当に感謝申し上げます。挨拶と致します。

今を生きる

書道 川上 鳴石

私は、左手で八年間作品書きをやっていたことがある。

丁度日展に九回入選した頃で、書道の月刊誌『墨』にも取り上げられ、これから自分の方向性が見えてきた頃だった。だが、頸椎狭窄症にかかり、右手が痺れて思うように筆が持てなくなつた。やむ無く日展、書芸院展等の出品を諦めていた。

しかし、試みに左手で書いた作品を師の黒田賢一先生にお見せしたところ「出来不出来じゃなく、こういう姿勢に感動するんや！」とおっしゃられ、作品づくりを続けることが出来た。

以前は歌選びも、作品になりやすいか、字面が格好良いかとか、あまり内容を理解せずがむしゃらに三百枚四百枚と、枚数だけを重ねた。

だが、腕を痛めてからは歌の

内容、時代背景などを理解して、この一枚、この一枚に全てをかけた作品作りをしている。

話は変わるが、私は広島カープ、阪神タイガースで活躍した金本知憲を尊敬している。

「鉄人中の鉄人」と言われた男だ。彼は一四九二試合連続フルイニング出場と一万三六八六イニング連続出場は世界記録だ。

私が言いたいのは、以外に知られていない一〇〇二打席連続無ダブルプレーという記録の方だ。

何故それを成し得たかというのと、「たとえピッチャーゴロなど、確実にアウトになるだろう打球でも、常に全力で走る！」を練習の時から心掛けた結果だ。

書もそうであると思っている。今日は練習だと思ったら練習の字しか書けない。どんな安い紙であっても、この一枚で仕上げる覚悟でなくてはならな

い。

「人生にリハーサルなし！」を信条として、これからの時間を少しでも理想に近づけるよう努力精進してまいります。



第11回日展 (2024) 心の花 川上鳴石

横180cm×縦80cm

「形こそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ」

兼芸法師

古今和歌集より

これは幕末、長岡藩の家老河井継之助が「最後のサムライ」として正義を貫いた姿を描いた司馬遼太郎の小説を映画化した「峠」のラストシーンで、継之助が妻に贈った歌で、(たとえ自分は山奥の朽ち果てようとする木のようにあつても心には立派な花を咲かす事が出来る)という内容で、自分もそうありたいと書いた作品です。

短歌部門

大田原短歌会 藤沼 緋紗子

那須地区芸術祭

最優秀賞

長嶋 禎子

ひとことも交わす事なく見送りぬ

どの星ですかあなたに逢いたい

ご主人を亡くされて、ご主人を想う短歌を多くお作りになられています。花が咲けば一緒に眺めたことを思い出し、夜空を見ればまた思い出す。その想いが痛いほど胸に伝わってきます。

今年度の作品から

良子

短冊の色とりどりに園児らの

書きし願ひよ天まで届け

待ちわびた夢にまで見た憧れた

仙石原のすすきやすすぎ

君と見し千鳥ヶ淵の花筏

ただ懐かしく想ふこのごろ

はらはらと舞い落ちる葉よもみじ葉よ

奥深き禅寺の庭

薬師寺の煤払い見て我もまた

重いこし上げ煤を払いぬ

照靖

今日あたり馬鈴薯をまくせつなるを

施設の窓辺に独り思ひぬ

久々にかかりし虹を喜びて

窓辺に集ふ施設の人ら

婆たちに昔の唄を聞かせつつ

施設の春のひと日は暮れぬ

在りし日の佐原屋呉服店今はなく

車並びて集く虫の音

血圧が高くも低くも今は皆

運命任せと思ひて暮らす

禎子

風花は高原山より吹かれきて

フロントガラスに触れて消えたり

球児らは甲子園の砂を泣きながら

思い出と共に袋に詰める

冬日とは思えぬほどの穏やかな

日射しとどきて心も温し

暑かった夏もいつしか過ぎ去りて

短い秋に雪虫の飛ぶ

来る年は九十三歳を迎えむか

することもなく夢遠ざかる

初代

秋の風吹きて揺らめくマユミの実

古代埴輪の耳を飾るや

夏越して多くの蕾つけおりし

シクラメンの鉢部屋に移せり

秋の日のリースづくりの楽しみを

ツルウメモドキの色付きに待つ

ガマズミの赤きを求め野を巡り

葉隠れの実を野鳥と競いぬ

モクセイの十字小花は風に舞う

土にオレンジの舞台現る

満寿子

秋深き故郷の墓に参りたる

吹き来る風に亡姉の声聴く

弟はつらい気持ちで怒りとし

予期せぬ病いわたしに告ぐる

草花もすいせんの花に競いて

咲きおり庭のかた隅

あきらめる思いの丈をたばねても

まだ切なさの心が残る

娘らの笑顔は私のご褒美よ

ご馳走よりも最の美味しさ



新年会

園恵

啓蟄の暦の春は遠のいて咲き初む

モクレンに雪の降り積む

斑の入りし白きベールを纏うよう

夏を告げるか半夏生の花

みはらせる城址公園梅咲きて

夫婦道祖神も笑みて寄り添ふ

病葉の湿る庭先いつの間に

青莖のばし曼殊沙華咲く

金色に穂先輝く麦畑

穀雨間近のこの時期が好き

尚武

例大祭奉納の品々飾りたり

鯛の鱗キラキラ光る

「元氣か」と姉の電話もまた嬉し

我には姉が三人おりぬ

老いという扉は自動扉なれ

躊躇いもなく八二歳来る

ガン告知受けたる友は凜として

食事中も笑みを絶やさず

かたちなき我が幸せよ朝床に

目覚めしときに又還りくる

緋紗子

冬隣り今朝の寒さに驚きぬ

空にジュピターキラキラきらめく

葉桜の古木の下の花びらの

重なる上を子等は踏みゆく

去年植えしジュンベリーの新芽を喰らふ

カラスは留まりて新芽を喰らふ

冬枯れの狭庭の青のヒイラギの

真白き花に粉雪の舞ふ

生涯学習フェスティバル(十二月七日)



イチイの実ヒイラギの実の色付きぬ

リースを作り冬の祭りせん

隆一

銅鑼の鳴る予感をさせる牡丹花

ただ音もなく佇みてゐる

ちよつと前話したことも忘れたる

見守る婦人に「だいじだ」と言ふ

誘われて河原に出でしシマヘビは

動かずなりぬ今朝の寒さに
凍る朝へびの骸に群がりて

カラス啄む寒風の中

へレボレス八重に開きて白きから

花色変化淡い緑に



鶯谷公園にて

今どきのお正月

藤沼 緋紗子

キーンと音のするような冷たい早朝、空には針のように細い三日月、そのそばには金星が輝いて、静かな元旦の朝を迎えました。

キーンと音のするよな碧空に

ビーナスと月の輝く元朝

今年の元旦は朝四時頃から起きて煮もの作り、鯛の照り焼き、角煮、ローストビーフを焼いてお雑煮の味を調べ、用意しておいた三段重の伝統のおせちを中心に岩手と福岡から来る娘達家族を待ちます。両親が存命でしたら、お叱りを受けるだろうなとも思いながら昔のお正月に思いを馳せます。実家の長崎のお雑煮は丸餅に鯛、人参、ほうれん草、アワビが入りあご出しの澄まし汁。餅は焼かずに茹でて、具材を盛り温めた汁をお椀に張ります。栃木の家では鶏肉（鴨肉）に醤油仕立てのお雑煮、切り餅を焼いて紅白のかまぼこ、ナルト、柚子、三つ葉をあしらいます。

丸餅のやわやわ香るあごだしの

やさしさ懐かし正月の膳

お正月に食べるお雑煮、なぜ「雑」の字なのでしょう。万葉集には「雑歌」という分類があります。

古代中国の辞書によれば「雑」は「五采相い合うなり」（五色の彩りが一つになる）と

か「最なり」（第一のもの）を意味するとあります。年の始めの雑煮も万葉集の雑煮もこの「雑」の意味だそうです。

万葉集の三大部位には、雑歌（そうか）相聞歌（そうもんか）挽歌（ばんか）があります。相聞歌は恋情を詠んだもの、挽歌は死者を悼む歌でこれに属さないすべての歌を雑歌と云うそうですが一番豊かな歌の集まりです。現代の短歌はほとんどが雑歌なのかと思います。

私が短歌を始めたきっかけは図書館（現在は生涯学習センター）に短歌会の作品の展示を見て参加させていただきました。県のかんらん歌会、二荒神社に献詠する宇都宮短歌会で学ばせていただきました。阿久津照靖さんが参加できなくなれば、現在は下野新聞の選者、泉谷暁先生にご指導いただいております。「寂しさ」や「死」といった人間個人の力ではどうしようもできない感情に直面したとき、参加者で歌評し合って知らない言葉に出会ったり、参加してよかったなと思います。ご一緒に参加してみませんか？



俳句部門

1. 大田原俳句会 中山 逍遙

◎第三十五回黒羽芭蕉の里全国俳句大会

自由題の部

星野高士 選 特選

春愁や黒田杏子を忘れない 星 樹人

村上鞆彦 選 特選

桑畑抜けて帰るや一年生 星 樹人

席題の部

小林貴子 選 推選

樹も草も待ちたる蛩舞ひにけり 中山 逍遙



● 四季 詠（句会報より）

月一回参加者投句と欠席者投句を合わせて句会を行っています。

新年

初句会一句は望郷津軽の景 忠 利

初春やピンク侘助二輪生け 智 香 子

初春の静寂破る能登の地震 逍 遙

春

オーボエの遠き旋律響くもり

白靴を送り長姉の喜寿祝

摘草や腰を伸ばせば遠男体

健 司

加名 恵

小来 川

夏

よろこべる下駄の足裏や夏祭

通夜の席蠅一匹のうとましき

起重機の漢の汗の塩と化す

晋 一

勝 美

節 子

秋

早逝の夫に一献新走

初秋や能登の塗椀ひかり沁む

停電の街虫の音を聞いてゐる

初秋やロビーで寛く美術館

和 子

かつ 子

樹 人

まさ 子

冬

かな文字は縦に美はし文化の日

朽ちてなほ祈るかたちに蓮濁るる

綿虫や尻重たげに浮上せり

息かけて拭う手鏡寒明ける

圭 子

吟 子

悟 郎

民 恵



◎投稿コーナーより

俳句との出会い

古川 忠利

昭和三十三年のまだ若かりしころ、東奥日報と云う地方新聞の俳句欄に私の句が載った事が俳句との付き合いの始まりである。

指導者は元教師の工藤四代治先生を中心に七人足らずの月例会であり、先生が後に青蛾を名乗っていた。よって先生にあやかりたいとの思いで私も当時を忘れまいと「青蛾」を併号にした次第です。当俳句会は地域句会なので、色々な帰属結社の方が居られる。よってここでは本名の忠利と使い分けている。

余白を生かす

林 圭子

書道の作品作りに禅のことは「牛に騎って牛に求む」を半紙に漢字四文字でまとめるとにした。

先生の指導で「半紙に対して文字が大きい。文字を小さめにする事で、白が生きる」と助言を受けた。

私は「牛」の二文字をどう違えて書くか、気をとられ、文字の大きさは考えもしなかつ

た。指摘に従い文字を小さめに修正したところ確かに白が生きてきた。余白によって清潔感もある。書道展では「白が効いている」作品に出合う。余白を生かすためには文字の大小だけでなく、他にいくつもの技量の必要なこともわかつている。

書において黒と白の響き合いから余白は生きるのではないか。

昔話

井上 泉江

病床での昔話をします。

五歳の頃、実家の父が句会を催しましたのでそれに参加させられました。参加者は昭和十八〜十九年頃太平洋戦争で負傷した傷病兵の皆さん、塩原療養所（現在の塩原温泉病院）の入院兵、少し元気な方達二十名ほど。実家（旅館）の大広間に集まって句を出し、句を選び高得点の人は優秀賞の賞品を受けました。面白くて子供ごろころに参加し、みなさんとおいしいお昼をごちそうになりました。俳句は幼い日の大切な友達なのです。

大田原の住人になってからさっぱり句も作りませんでした。が、斉藤民恵さんと仲良しになりました。文学の市民学校では亡き益子勝次先生の教えを受けたりしました。

現在九十歳となり病気がちで大分呆けが進んでいます。皆様の俳句を詠むのが嬉しくあと一年楽しませていただきたく布団に寝てこの手紙を書いています。

どうぞよろしく願ひ申しあげます。

紫陽花の大輪見事君臨す

今年また紫陽花たちに包まれり

画眉鳥

豊島 悟郎

令和二年ふれあいの丘での探鳥会に参加したのこと。いつも気になっていた声量豊かで晴れやかに囀る鳥について講師に聞いた所、多分画眉鳥だろうとの事。初めて知った名である。

早速広辞苑で調べると、スズメ目チドリ科の一種。原産地は中国南部、声が良く飼い鳥、日本で一部の低木林で野生化と。また栃木県の野鳥図鑑にヒヨドリより小形、成鳥は黄褐色、尾は黒褐色で長い。目の周りと後ろに伸びた細い帯が良く目立つ。県内で初めて記録されたのが二〇〇三年、低木の枝に止まってクロツグミに似た大声で鳴く。サンコウチョウやウグイス、キビタキなどの声を真似する事もある。地上を走り廻り昆虫や果実を食べると。

思うに以前は遠く希な囀りだったものの今では民家近くまで来て囀るようになった。

そもそも中国旅行者が鳴き声に惚れ込み土産として求め、家の中で飼って見た所あまりの大声に困り放鳥した結果だと考えられる。

しかし、その名はまだ知れ渡っていないようである。早朝の涼しさの中で精一杯大声を張り上げる声は晴れやかで気持がさっぱりとし、元氣・勇氣を与えてくれる。また句材としても貴重。警戒心の強い地味な鳥だがこれからも気に掛けて行きたい。



出典：フリー百科事典『ウィキペディア』
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ガビチョウ>

画眉鳥の姿を見たや夏の朝

鹿島川の溜池

中山 逍遙

大田原は昔、奥州街道の宿場町であり、大田原城を中心とした城下町でもあった。

宿場町として北は蛇尾川沿いの大久保木戸口から、金燈籠交差点を経由して薬師堂、愛

宕神社のある今の神明町交差点付近の新田町木戸口までの一・七キロである。

正徳三年（一七一三）ころにはここに大きな溜池があったとある。

現在は鹿島川が流れており旧奥州街道は現在陸羽街道とも言われ交通量も多く大田原の主要路となっている。

平成十年八月、台風四号の記録的な大雨により鹿島川の流域は床上浸水被害を被った。鹿島川の改修事業は昭和五十四年度から着手されていたがこの浸水被害から河川整備が加速された。

現在、工事は薬師堂裏の旧岩井屋辺りを中心に二基の調整池が整備中で、神明橋の掛替えも含め令和九年を目標に進められている。掘削を最小限にし、可能な限り生物の生息や生育場所を確保すると共に植生回復に努めていくとある。

正徳三年ころの溜池が三〇〇年後、また同じ場所に調整池として再現するという歴史めぐり合わせに不思議さを感じる。

2. 風の会

直寛 正美

● 活動趣旨

私たちの暮らしは四季の推移と深く関わっています。移りゆく季節の中で様々な思いが自然な私たちで私たちに訪れます。ふとした発見、驚き、喜び、違和感、そのように望まずとも無理なく去来する心情です。そうした思いに言葉は目に見える「形」を与えてくれます。加えて他の方々に伝える「働き」を持たせ、そこに詩を吹き込むなら、俳句という文芸が表れます。俳句への向き合い方は人様々ですが、句会は互いの俳句を理解し評価し合う場です。四季の移り変わりの中でそれぞれの体験と実感の裏付けのある俳句の表現はまたそれぞれに異なり、句会は共感、驚き、失意、喜びなど一句の世界を共有できる場であり時間でもあります。季節の推移と言葉そして俳句。

「風の会」はそうした互いの俳句に向き合い高め合う場を心掛ける一方、それぞれの思いを俳句を介して共感できる時間を持ちたいと考えています。しかし、実感と言葉を自分の中で合致させるために、またそのことを伝えるためには、言葉による表現上の技術が求められます。季節の中の言葉に気付き、思い

を託し、思いを形にする技術を探す。句会はそのような場と時間であり、句会「風の会」はそのようにありたいと考えています。

● 活動報告

生涯学習センターにおいて、毎月第二、第四水曜日に俳句を学ぶ自主講座句会として実施しています。現在会員は十四名で、時折り俳句講座あるいは設問形式の俳句トレーニングなどを交えながら、俳句の時間を共有しています。

令和六年十一月二十七日、那須野が原公園へ吟行。冬の真近き雨上がりの清々しい一日を散策。発見の効いた俳句を会員それぞれが一句としてまとめました。折々の時間や場所で感じうる俳句作りを楽しんでいこうと考えています。

● 会員近詠（令和六年の句会から）

浚渫の川底澄みて夏来たる きみ
書を閉づる秋のかみなり葉とし えいた
主婦てふ肩書のあり花逍遥 葵衣
木犀の風に乗り来る坂の道 かほる
はまなすや道産子今も逞しき 順子
戦なき日本を吊るす雛の宿 水葉
建国日タンスの底の日章旗 雅芳



明易しいまだ真白き今日来たる
ものの芽や昨日の色と今日の色
蓑虫やのらりくらりと小言聞く
今日のこと今日話すべく栗ご飯

ひで子
比呂
未季
正美



3. 秋桜の会

森 加名恵

大きな行事の一つに、令和六年五月に秋桜の会本部で山形へ一泊二日の吟行をしました。上田耕里部長の故郷が山形であることから仲間の間で前々からそこへ行きたいという話があったからです。

結局、秋桜の会は大所帯なので、大田原句会と佐良土句会がそれぞれの計画のもと、分かれて吟行地を決めることになり、大田原句会のみで実行に至りました。佐良土句会の吟行がまだでしたので、再度十月に秋桜の会全員に声を掛け、那須神社と那須与一伝承館を見学、那須ベルビュールホテルで句会を持ちました。欠席者も多く事前投句を受け付けましたが、幸いにも鯛の会の三名がゲストとして参加され、実のある吟行会となった様に思います。

● 秋桜の会 山形(五月二十一〜二十二日)

峠越え村を色取る桐の花 耕 里
窓ぎはの人のうたたね新樹光 節 子
山寺の緑まぶしき夏来る 恵 子
万緑へ引き込まれゆく仙山線 一 典
青嵐や蔵王温泉アルカリ湯 さとみ
左沢別れ舟歌語り継ぐ 浩 二
旅初め皆それぞれ夏帽子 ひろみ



絵馬堂へカラコロ揺らす青嵐
十七冊の茂吉の歌集風薫る

富 子
加名恵

● 秋桜の会 合同吟行(十月九日)

那須神社色なき風に招かるる 恵 子
佳き人に添ふは嬉しき菊日和 佐くら
那須与一射抜く扇や爽やかに(ゲスト) 恵 章
神域の暗き鳥居や秋の雨 美 子
秋の雨芭蕉渡りし太鼓橋 (ゲスト) 小来川
秋霖や石灯笼に歴史あり 草 秋
楼門の褪せし雲龍秋時雨 富 子
晩秋や常盤木の緑際立てり 逍 遥
朝ぼらけ小枝揺らして百舌鳥鳴けり 茂 雄
嬰抱きて傾ぐ野仏秋の虹 清
平安の気に包まれし秋霞 浩 二
与一公の伝承館訪ふ寒露かな 一 典
子に習ひ紫文を読みし夜長かな 絹 女
色変はる軍馬慰霊碑秋の雨 晋 一
くるくると芋の葉に露よるべなし 加 代
雨しまく真昼のかげり竹の春(ゲスト) 春 香
遠山は紫に暮れ刈田の香 ふみ子
いつの間にえくぼは皺に秋の暮 からぬ
芋の葉に集めし露に空映る 明 美
秋澄みて諸行無常の道を行く さとみ
楼門に続く参道秋の雨 義 郎
木下闇そつと寄り添ふ道祖神 純 子
光琳の景色見るかに燕子花 佳 子
読み返す母の便りや秋涼し ひろみ
遠き日の一億特攻曼殊沙華 幹 子

渡良瀬のトロッコ列車谷紅葉
波間より漂ふ鮭の軀かな
からくりの与一の美麗秋深し

敏子
八重子
加名恵



(退会者並びに欠席者の句も一句掲載して
います。)

● 令和六年度俳句大会の成果
◎黒羽芭蕉の里全国俳句大会
自由題の部

星野高士 選 秀逸	指切りの指で寒紅さしにけり	森 加名恵
星野高士 選 佳作	大空へ風の暴るる野焼きかな	江連 一典
高田正子 選 秀逸	寒の入り指のすり傷ひとつ増へ	黒澤 恵子
高田正子 選 佳作	種を採るはしから零れ秋桜	森 加名恵
高田正子 選 佳作	指切りの指で寒紅さしにけり	森 加名恵
吉報の第一便や春の雪	ベーコンの弾ける春のふらいばん	山之内 清
村上鞆彦 選 佳作	ベーコンの弾ける春のふらいばん	山之内 清
石倉夏生 選 佳作	凛として弦音響く寒稽古	浅野 茂雄
	銀嶺の山へ朝日の力湧く	天沼 明美
	しゃぼん玉いもどかに吾子の声	鈴木ひろみ

秋桜の会の現状と展望

部長 木下 浩二

私はシルバー大学卒業後、秋桜の会に参加
でき俳句を創造する喜びを会員の句を介し

て、その奥の深い世界を学びながら日々句会
を楽しんでおります。そして、森加名恵代表
の的確な指導により、日々上達しつつある様
に思います。代表は高校生より俳句を始めた
というキャリアの持ち主で、現在まで数々の
賞を受賞されておられます。

現在もシルバー大学校の指導をされてお
り、大田原市を中心に県北の那須町、那須塩
原市、また、那須烏山市、那珂川町、矢板市、
さくら市等、居住地に分かれ活動を行って
おります。会員数も均衡しておりシルバー大学
卒業生が大半で増加傾向にあり、現在は総数
で三十名近く在籍しています。

活動としまして月一回、兼題と会員の出
席題を合わせ五句の出句、そして選句は五、
六句（出句人数により変わる）その中から特
選一句を選び合評し合います。代表の選は今
後の糧になるような選なので参考になりま
す。また年に一、二回合同で吟行を行い昨年
は那須疎水運動公園、今年は那須神社・那須
与一伝承館を見学し句会を開催しました。そ
の場その場で臨場の五句を各自発表して、切
磋琢磨し合いながら活動をおこなっておりま
す。そしてまた、私達は幸運にも芭蕉ゆかり
の地に生活しており、毎年六月の黒羽芭蕉の
里全国俳句大会は、私達の活動に良い影響を

与えてくれています。昨年より私も秋桜の会の活動と並行して俳句大会の実行委員を仰せつかりました。有名な俳句の先生方が選者なので全国のレベルが理解出来て幸せです。

今後は、私自身向上して秋桜の会の進行をよりスムーズにして会員の相互親睦を大切に、楽しく活動する様にして行きたいと思えます。

季語について

黒澤 恵子

若い頃は俳句は難しくてハードルが高いと思っており興味がありませんでした。しかし、古希を過ぎて初めて学んだ俳句の世界は予想とは違って大変興味深いものでした。学べば学ぶほど、読めば読むほど、俳句の奥深さに魅了されてゆきました。もっと若い時に学んでいれば違った感性が湧き出ていたのではと、後悔する事多々あります。でも、紙と鉛筆と歳時記さえあれば学べる俳句。呆け防止と自分史になると思いコツコツと続けたいとおもっております。

たった十七音字の短い詩形の中の歳時記による季語の言葉に魅せられました。日本ならではの四季を通じての天文・生活・行事・動

物・植物を美しい言葉で表す季語、そして季語から広がる想像力、日本以外には無い日本ならではの美しい繊細な言葉に心動かされました。

春夏秋冬のはっきりした四季のある日本だからこそ生まれた文化だと思います。

しかし最近、地球温暖化により春と秋が短くなり、海水温が上昇するなど、動植物に様々な弊害が生じています。やがて「冬と夏の二季になってしまふのでは」、と世界規模で危惧されています。私達の住む四季のある美しい国日本もやがて熱帯化して四季折々の美しい風情を楽しむ事が出来なくなるのでしょうか。先人の作った美しい季語、歳時記も変わっていくのでしょうか。

第三十九回

大田原文化協会美術展

「親しみやすい美術展へ!!」

美術部長 安達 信悟

大田原市制施行七十周年記念としての第三十九回大田原文化協会主催の美術展を十一月十五日～十七日の三日間、那須野が原ハーモニーホールの第一・第二ギャラリー・スロープにおいて、美術部の会員一四七名の力作一六八点の一斉展示を開催しました。

展示内容は、多くの分野のグループ、教室、個別で創作活動された方々の作品を出展して頂きました。

(出展数推移参照)

来場者は三日間で四二二名と多くの方に大田原の芸術作品を鑑賞して頂きました。

アンケートでは初めての来場者が三十六%と前年より微増しましたが、来場者の八十%が六十歳以上の高齢者であり、児

童や学生さん、現役世代の多様化する社会で、ワークライフバランスや趣味での芸術・文化への参加を啓蒙し、心豊かな街作りに努力する事が必要と思いました。

寄せられたコメントでは素晴らしい作品、楽しく、久しぶりに心が癒された、感動した、毎年期待しているなど、嬉しいお声を多数頂きました。また、出展作品に感動されて、是非購入したいと希望するお客様もありました。

分野別で、【洋画】小学生のお子さんとお母さんと絵が並んでほのぼのと癒されました。【写真】外国人の会員の作品に親子の情を感じました。【トールペイント】【切り絵】トールペイントなどなじみのない作品を見ることが出来、良かった。【写真】色が良く出ており美しかった。【華道】花の種類に驚きました。紅葉狩りに来ている気持ちになりました。初めて聞く流派もあり違いや花の名前が分かること良

い。【竹工芸】斬新なアイデア・デザインでそれを形にする技術が素晴らしい。【書道】文字情報説明書きがあると更に楽しくなる。【その他】水墨画があるともっと良い。全体的に今回は特に充実した作品が多い。ご協力ありがとうございました。次回以降に参考にさせていただきます。新しい分野の参加も歓迎致します。

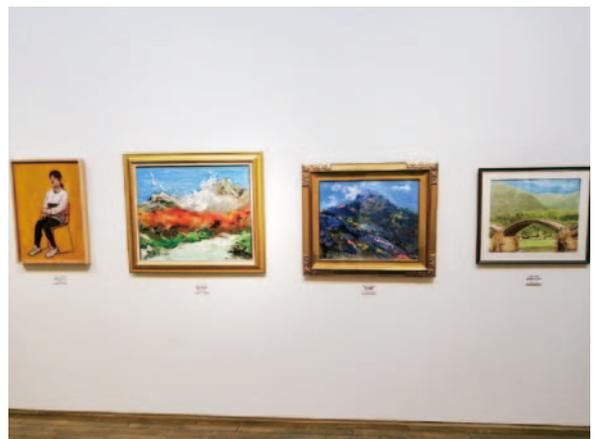
来年は第四十回の節目の美術

展となります。開催は十一月二十二日(土)～二十四日(月祝振)の三日間、那須野が原ハーモニーホールで開催予定です。より多くの作品と多数の参加を願います。

美術展の開催にあたり市の文化振興課様には大変お世話になり、また、美術部役員皆様のご協力に感謝いたします。今後ともよろしく願っています。ありがとうございました。

大田原文化協会 美術展の出展数推移

部 門	第 35 回	第 36 回	第 37 回	第 38 回	第 39 回
洋 画	25	31	35	27	26
日本画・仏画	1	2	8	7	6
水彩画	9	15	21	19	20
写 真	10	10	12	16	17
華 道	12	17	19	15	19
色紙画	16	17	15	12	13
陶 芸	20	20	23	23	20
書 道	15	15	13	14	14
竹工芸	15	13	13	13	15
工 芸	7				
彫 刻	4	10	8	9	8
版画・絵 切り絵 鉛筆画	1	3	4	6	4
トール ペイント		9	11	10	7
展示合計	135	162	182	171	169





大田原油絵クラブ

令和六年度のあゆみ

大田原油絵クラブ 蜂巢 貞美

令和六年度は講師の齋藤勝美先生が連続八回目、通算十二回目の日展入選を果たしました。瀧野洋子、蜂巢貞美会員が県芸術祭美術展で上位に入選しました。二月のハーモニーホール展では山川喜世三が奨励賞に入賞しました。また、小学生と中学生の会員も多くの展覧会に出展してくれました。一年間の展覧会展など下の表のとおりです。

令和七年度は会のシステムを改革します。今まで講師をお願いしていた齋藤先生と日展作家の菊岡先生も一般会員として一緒に勉強する予定になっております。したがって月謝はいらなくなり全員無料です。

教室は毎月第二と第四の月曜日、午後五時から九時です。祭

月 日	内容 (場所)
9月21日～10月3日	栃木県芸術祭美術展 (栃木県立美術館)
10月10日～10月20日	大田原西地区文化祭 (西地区公民館)
11月15日～11月17日	大田原文化協会美術展 (ハーモニーホール)
2月8日～2月16日	ハーモニーホール展 (ハーモニーホール)
3月	グループ展 (大信金本店ロビー)
3月	年度末反省会 (片岡屋)

日の時は午後三時から六時になります。場所は生涯学習センターです。
参加不参加、入会退会も自由。遅刻早退も自由。なんの束縛もありません。本当に勉強したい人が自由参加でやりましょうということになりました。
どんな結果になることやら皆様、注目して頂きたいと思っております。

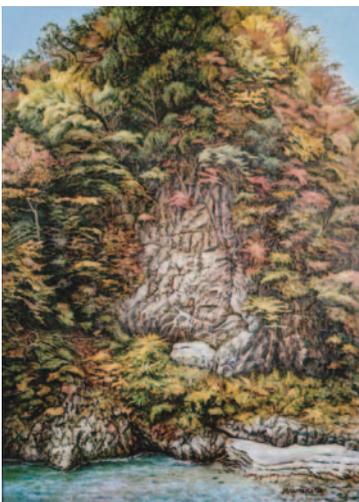
文化協会美術部にはグループとして入会なのか、個人会員になるのか今のところ分かりません。



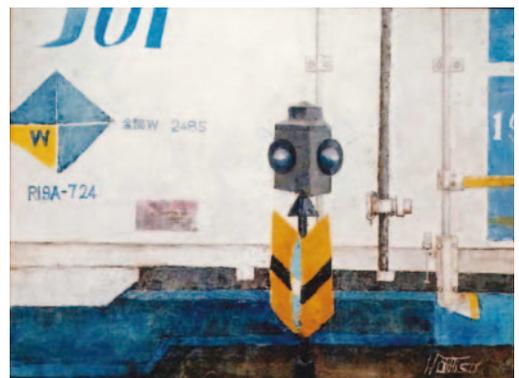
日展入選作品 齋藤勝美 F100号



県展入選作品 瀧野洋子 F80号



ハーモニーホール展奨励賞作品 山川喜世三 F20号



県展入選作品 蜂巢貞美 F80号

たちばな画遊会と 写佛の会について

たちばな画遊会

後藤 茂（閑鐘）

たちばな画遊会は油彩を中心に教室を開いて何でもありの教室です。自分の好きな材料を使用して作品作りを楽しんでいます。時にはスケッチ旅行に行く事もありそれぞれの作品に仕上げられています。年一度の大田原美術展、西那須野美術展、二年に一度ほどの教室主催の展覧会などです。

また、七年ほどになりますが、生涯学習センターにて写佛の会、「佛様を写し書く」日本画の顔彩を使用し月二回の写佛教室を開いています。写経と同じく心静かに教材に色づけしていきます。心静かに佛様に向き合うのもいかがでしょうか。



水彩画とともに歩む

みず絵会 越沼 てつ子

五十数年前発足の「すみれ会」を母体とした「みず絵会」。今年度、滝沢年子会長からバトンを引き継ぎました。

指導者もなく自主活動の中、西地区公民館祭りに十月十九日から二十日まで、展示することができました。

十一月十五日から三日間、大田原文化協会美術展ではハーモニーホール第二ギャラリーに五名が出展できました。

十二月七日のふれあい生涯学習フェスティバルにも活動の発表の場をいただき、みず絵会も展示しました。

また、令和七年三月に、七年連続で那須野が原公園緑の相談所内で水彩画展を開催しました。

七十代から九十代の数人の在籍で継続も危うい状態ですが、人との触れ合いを楽しみつつ、個性を生かした作品づくりに努めています。

西地区公民館祭り（10月19日～20日）



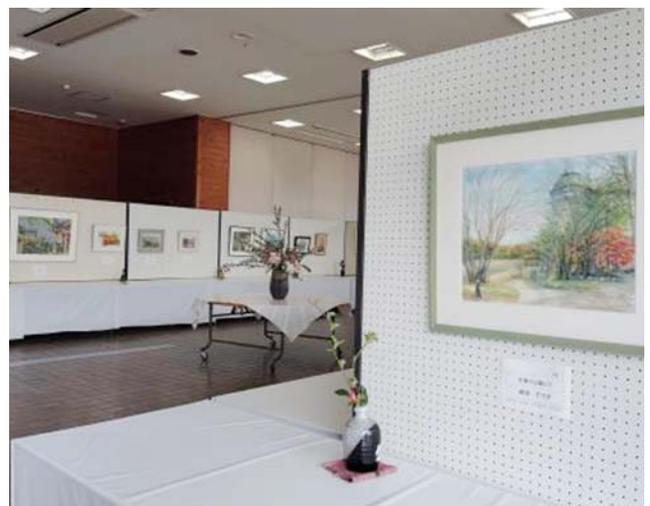
大田原文化協会美術展（11月15日～17日）



ふれあい生涯学習フェスティバル（12月7日）



那須野が原水彩画展（3月7日～9日）



書道部の結果と

書展について

書道 塩野 玄機

令和六年度、書道部の出品点数は十四点でした。墨心会社中から九点、抱原会社中から五点で、社中に属さない方の出品は見られませんでした。

表装の仕方から見ると額装六点・パネル一点・軸装七点です。大きさは半折が六点で正方形に近いもの二点、他は色紙ほどの大きさの作品でした。

内容は漢字一文字の作品から格言などの四、五文字の作品が多くありましたが、多字数の臨書や詩文等もあり、かな二点、刻字一点と多様でした。墨色は淡墨が二点、他は全て濃墨でした。以上が書展の外観です。

出品点数は多くはありませんが、作品の形態や内容が多岐にわたり、楽しく鑑賞できたと思われます。

小品が多く展示スペースは、

かなりゆとりがありましたので、出品者をもう少し確保できればと考えています。社中に拘らず書に親しんでいる方々に声をかけ合い、出品仲間を増やせるようにしていきたいものです。

展示作品に小品が多いのは、搬入・搬出を出品者が自身で行うので、やむを得ないと思います。鑑賞する側からは、構えずに気軽に穏やかな気持ちで見られたのではないかとも思います。

また、今年度は対面に華道の作品が展示されていきましたので、お互いに作品を引き立て合い、華やかな雰囲気醸し出されたように感じました。

さて、今回の展示から離れませんが、大田原市を主に本年に行われた書展（イベントの一部も含む）を上げてみます。

筆者は抱原会に所属していますが、会に出品依頼があったり、参観案内があったりしたものです。

一月 第十九回ハーモニーホール展

六月 酒井真沙遺墨展

七月 わかくさ会書展

洗心石門会書展

原野展

九月 那須地区芸術祭

十月 抱原会書展

墨心会書展

十一月

金田地区他公民館文化祭

書道作品展示

十一月

大田原市書道連盟展

更に栃木県芸術祭や各社中展（個人の所属する上部組織への出展）があります。こうして列挙してみますと、書展はなかなか活発であるようです。

しかし、人口減少、文字離れ、趣味の多様化、高齢化などの様々な社会的影響もあり、書を生涯学習の一つとされる方は年々減少傾向が見られます。

願いは、少しでも興味を覚えられましたら、いくつかの書展に足を運んで欲しいと思っております。気軽に楽しく学ぶ場はたくさんあります。

華道登録無形文化財に

華道 増子 梢風

十月の新聞の見出しののっけい
ました。草花を伝統的な技法で
生ける「華道を重要文化財に指
定」することを求めた。華道は
室町時代以降多様な生け花の
技法を生み出し人々の生活に浸
透、また各流派では伝統的様式
を繰り返す稽古し精神性も追
究、美意識の継承を図っており、
芸術的価値が高いと判断されま
した。長く技術継承に取り組む
ことを願っています。

令和六年度那須地区芸術祭、
文化協会美術展に参加すること
ができました。

文化振興課の皆様心より感謝
申し上げます。



今年も茶会ができた喜び

茶道部 瀬尾 清子

今年こそ、令和六年は良い年になってほしいと思っていた一月一日に発生した能登半島地震。爪痕は深く、さらに石川県の能登地方を襲った豪雨で、何人も尊い命が奪われ心が痛みます。不安の中で日々を送っている方々が、一日も早く日常を取り戻してくださる事を心より願っております。

今年の茶会は、六年ぶりに私が当番でした。十月とは思えないくらい暑い雨も多かったのですが、準備の日も茶会当日も大変でした。来てくれたお客様にも申し訳なかったと思います。終わってみれば今年も茶会ができた事に感謝です。三年間コロナで開催する事ができなかったのですから。

私事で申し訳ないのですが、今回の茶会で孫三人にお茶のお運びのお手伝いをしてもらい、私の夢が叶いました。

最近はやい方のお茶への関心が薄れ寂しい気持ちになります。



大田原宝友会

(宝生流 謡曲の会)

大田原宝友会 蜂巣 貞美

基本的には毎月第一第三の水曜日に西那須野の三島ホールにて能のうたいの稽古をしています。午後一時から四時までの時間で会員により時間がちがいます。令和六年度の事業は左の表のとおりです。

月 日	内容 (場所)
4月27日	栃木県宝生流謡曲大会 (栃木県総合文化センター)
11月10日	那須地区芸術祭 (三島ホール)
11月17日	栃木県芸術祭謡曲大会 (栃木県総合文化センター)
12月21日 不参加	前田能楽師発表会 (東京宝生能楽堂)

4月～3月、第1第3水曜日
三島ホールにて稽古をしています。

現在会員は七名ですが高齢者が多く体調をくずす会員も出てなかなか全員が揃うことがあります。

ません。若い方の入会を願っています。若いが思うようになりません。

ユネスコ文化遺産になっていく世界の古典芸能の下支えである私共のような教室がもっともっと盛んになることを願っています。



盆栽園芸部門

盆栽・園芸部長 平山 正彦

令和六年度の盆栽園芸部門の活動は、まず一月二十九日生涯学習センターで会員十五名が参加し、第五十三回那須支部通常総会を開催した。二月に計画した第九十八回国風盆栽展日帰り研修は参加希望者が少なかったため実施を見送った。

七月には、十二日から三日間那須野が原公園で夏季盆栽展を開催した。五葉松など十八席を展示し、約三百人の来場者があった。

また、十月には第五十七回那須支部盆栽展を同じく那須野が原公園で開催した。この盆栽展では新しい試みとして工芸作家とのコラボ展として、竹工芸家二人、硯石作家一人が参加した。それぞれの作品を盆栽の間に展示し、盆栽十七席と合わせてユニークな盆栽展となった。

十一月十六日、埼玉県寄居町で開催の第八十七回大雅展日帰り研修旅行を実施した。これには会員等十名が参加し、美原公園に集合してマイクロバスで寄居町に向かった。

大雅展では、百二十六席の選りすぐりの素晴らしい盆栽の数々を鑑賞堪能した。特に会場に入って直ぐに大きな黒松など特別招待の六席が目を引いた。

この後、埼玉県花植木流通センターに寄り、道の駅まえばし赤城で昼食を食べて帰ってきた。天候に恵まれ有意義な研修旅行だった。

以上、令和六年度盆栽園芸部門の活動です。



夏季盆栽展会場



夏季盆栽展（7月12日～14日）



第57回那須支部盆栽展会場



第57回那須支部盆栽展（10月4日～6日）



硯石



竹工藝



ガマズミ (ヨツドメ)



柿の盆栽



大雅展日帰り研修旅行 (11月16日)

全国将棋サミット2024

大田原将棋愛好会

熊田 茂

令和六年十月、日本将棋連盟百周年、市制七十周年を記念して「全国将棋サミット」が開催され、羽生善治会長を始め九名の棋士、女流棋士にお越しいただいた。百周年という記念の年に大田原市でサミットが行われたのは、本市が十九期連続で王将戦を開催できたことを評価されることであろう。

将棋に力を入れている全国の二十四の自治体の取組発表では、今後の大田原市としての取組の参考になった。棋士とU字工事とのトークショーでは「勝負飯」や「お国自慢」「忘れられない日」などのテーマで楽しいトークがあった。その後、増田康宏八段と渡辺和史七段との記念席上対局が行われた。井上慶太九段のユニークな解説があり、会場は大いに盛り上がった。私たち大田原市将棋愛好会では、昨年度から「将棋道場」を月に二回、西地区公民館で行っ

ている。誰でも自由に参加できるので、できるだけ多くの人に参加してもらいたい。将棋の魅力、奥深さを伝えていき、「将棋のまち、大田原」を発展させていきたいと思う。



棋士・女流棋士



記念席上対局



トークショー

大田原文化協会事務局より

(1)文化協会事業報告

- 令和6年
- 4月25日 会長・副会長会議 (大田原市役所)
 - 5月15日 理事会 (生涯学習センター)
 - 5月30日 評議員会 (生涯学習センター)
 - 7月12日～14日 夏季盆栽展 (那須野が原公園)
 - 9月18日 会報編集会議 (大田原市役所)
 - 10月4日～6日 盆栽展 (那須野が原公園)
 - 10月6日 茶会 (黒磯公民館)
 - 10月6日 短歌会 (西那須野公民館)
 - 11月15日～17日 美術展 (ハーモニーホール)
- 令和7年
- 1月24日 会報編集会議
- ※書面にて開催

1月31日

県文化振興大会

(栃木文化会館)

2月26日

会報編集会議

(大田原市役所)

3月21日

会報編集会議

(大田原市役所)

(2)会員加入状況

大田原文化協会の令和7年2月末日現在の会員数は37団体で292名となっています。

(3)各部署事業費の配分について

専門部	納入者数 (A)	納入金額 (A × 500 円)	配分額 (A × 800 円)
文芸	64	32,000	51,200
美術	147	73,500	117,600
ステージ	27	13,500	21,600
囲碁・将棋	6	3,000	4,800
盆栽・園芸	25	12,500	20,000
茶道	3	1,500	2,400
合計	272	136,000	217,600

※1団体(20名)が活動休止中。

(4)役員名簿

大田原文化協会 令和6年度役員一覧

No.	役職	氏名	専門部	構成部門
1	会長	田中和夫	ステージ	吟詠
2	副会長	安達信悟	美術	彫刻
3	〃	熊田茂	囲碁・将棋	将棋
4	〃	藤沼久子	文芸	短歌
5	〃	平山正彦	盆栽・園芸	盆栽
6	会計	丸山昭喜	美術	陶芸
7	理事	川上鳴石	美術	書道
8	〃	金沢裕司	美術	写真
9	〃	瀬尾清子	茶道	茶道
10	〃	越沼てつ子	美術	水彩画
11	監事	蜂巢貞美	美術	洋画

専門部

専門部	役職	氏名	構成部門
文芸部	部長 副部長	藤沼久子 中山道遥	短歌 俳句
美術部	部長 副部長	安達信悟 石崎直由	彫刻 洋画 日本画 水彩画 色紙水彩画 華道 書道 写真 工芸 竹工芸 陶芸
ステージ部	部長 副部長	田中和子 望月洋子	吟詠 民舞 演劇 剣詩舞 日舞 邦楽 郷土芸能 民謡 三味線 謡曲 新舞踊 豎琴
囲碁・将棋部	部長	熊田 茂	囲碁 将棋
盆栽・園芸部	部長 副部長	平山正彦 伴 敏美	盆栽
茶道部	部長	瀬尾清子	茶道
広報部	部長	飯島健司 藤沼久子 越沼てつ子 岩上知子 阿久津正弘	文芸部 (俳句) 文芸部 (短歌) 美術部 (水彩画) 美術部 (洋画) 美術部 (竹工芸)

編集後記

広報部長 飯島 健司

令和六年度は、県内での新型コロナウイルスの感染確認から五年となりました。専門家は我々の危機意識の低下に警鐘を鳴らしています。そんな中、流行状況に応じた感染対策を心掛けながら、文化・芸術活動が活発に行われました。

さて、能登半島地震の発生から九か月、記録的な大雨が半島北部を襲いました。二度の大災害に見舞われ、「ここで暮らしていいのか。」住民は途方に暮れています。このような状況の中でも、私たちに生きる勇気や希望を与えてくれるのは、文化・芸術です。地震で傷ついたり、豪雨で泥が付いたりした輪島塗の漆器を洗って届ける、ボランティア活動が県内で行われたこともその一例です。

結びに、御多用な中、玉稿をお寄せ頂きました皆様、またお骨折り頂きました文化振興課の皆様に対し、敬意と感謝を申し上げます。この会報が皆様の努力の足跡として、更なる御活躍の参考となることをご祈念いたします。



令和6年度広報



**令和6年度
会報「大田原文化」第33号**

発行日 令和7年3月31日

発行者 大田原文化協会

会長 田中 和夫

編集 広報部

事務局 大田原市産業文化部文化振興課

電話 0287-23-3129

印刷 株式会社 松井ピ・テ・オ・印刷